用例辞典の編集について

林　大

国立国語研究所が辞書の編集をその事業の一つに掲げていることは、研究所の設置に示されている通りです。それは、研究所の調査研究に基いての、現代語辞典、方言辞典、歴史的国語辞典その他研究成果の編集及び刊行とあります。その辞典というについては、さきに「沖縄語辞典」があり、辞典に直接関連するものとして「分類語彙表」「現代語の助詞・助動詞――用法と実例」「動詞形容詞問題語用例集」や「安愚楽鍋用語索引」などを刊行しています。また、各種の語彙調査や同音語・類義語、動詞・形容詞や比喩表現についての研究の結果も、辞典の編集に関係するところが深いものと言えましょう。今日もさらに同様の基礎的調査研究が進行していますが、ここ数年来、辞書そのものを課題として、辞典編集準備室と辞典編集調査会を設けその編集計画を考えてきました。その計画がただ今定まっているわけではありませんが、ごく大まかにその要をお話してみようと思います。

かつて昭和三十四年の「国語学」第三十九輯に中村広徳氏が「国語大辞典編纂の方法に関する一試案」を寄せておられます。当時研究所は、直接かような大辞典に手をつける段階ではなく、そのままその提案を黙殺するような形で二十年近く経過することになりました。今改めてわれわれが考えているのは、氏が特に細かに手順を説かれた用例採集ということを中心とする作業で、それが大辞典作成の根本になろうというものです。その実際的行動は、今日においてもなかなか困難な事情にあることはその通りですが、とにかく国語の大辞典を目指して、できるだけの仕事の見通しを立てたいと思います。

それは、文字による日本語の記録が始まって以来の、日本人の用語のあらゆる用法を記述するものです。その基本的な資料として、各時代にわたる実際使用例の全集成を頭に描いて、これを「日本大語誌」と仮に名づけています。「日本大語誌」は日本人の文化財としての日本語の記録で、用例を伴った日本語の語彙の登録簿です。それはある意味で東大史料編纂所の編集百年にわたる「大日本史料」に比べられますが、恐らくそれをはるかに超える大事業になりましょう。日本大語誌は、それぞれの時代のできる限り多くの用例を集め、その結果として、それぞれの語の語形、意味、用法、表記等の使用開始の時期、変化した時期、使用の状況等を明らかにするものです。

実例を収集する意味を今さらここで述べる必要はありますまい。従来の大辞典も用例を重視しています。それは注釈を作るための資料であることはもとより、まずその記述の根拠として、理解を助けるものとして、それぞれ実例を掲げています。さてその実例を手に入れるために、作品の用語総索引の類が、万葉集総索引を始め数多く作られています。それらは国語辞典のために、非常に貴重な資料となるものですが、残念ながら今日のところその大多数が和文系統の作品に関するものであって、漢文系・漢文くずし系の文章には十分及んでいません。これからの大語誌は、日本人が自己の表白として書き、かつ日本語として読んだに違いないすべての語を含まなければならないと考えます。

しかし実のところ研究所には、国語の歴史的な発達に関する研究が創設以来の課題であるにも拘らず、いまだにそれを担当する部門が充実せず、明治以前に遡っては全く体制が出来ていないので、直ちに大語誌の全体に取りくむことはできません。ただ現代の部は大語誌の一部であるとともに、現代語研究の一翼として当面の作業目標とすることができましょう。すなわち、この歴史的な用例の収集は、現代語成立の経過を直接に明らかにするものとして重要な意味をもつと考えます。

国語史における時代区分にはいろいろの考え方があるでしょうが、用例の広い収集作業を考えると、機械的な区分も一まず許されるでしょう。現代の部は一往、一八五〇年ごろをその幕明きと見ることができようかと思います。そしてこれを三期に分けるとすると、一九〇〇年、一九五〇年に区切りをおくことができます。今われわれは、開国と統一によって新文化、新教育、新国語の展開を準備した第一期と、第二の開国と民主化に伴って情報化の著しく進展しつつある最新の第三期とを、ないがしろにするわけではもとよりないけれども、まず第一着手として第二期を当面の範囲にすることを、調査会にはかっています。これはすなわち現代語の開花の時期で、ほぼ国定読本が全国に布かれていた期間にあたり、いわゆる口語文が確かな地歩をきずくとともに今日の標準的国語の基礎が成立った、重要な時代と考えられます。この第二期を基準として逐次前後に作業を進めたいというわけです。

なお、「日本大語誌」という名においては、方言の部を閑却するわけにはいきません。方言には、既成の方言集の記述を集大成するとともに、全国各地の故老に保存される俚言だけでなく、全国的統一の中には日々改進される地域的言語の実態を調査することが緊急に必要であることはいうまでもありません。しかしこれは、作業の性質が大きく異なるので、他の計画に待つこととし、現代語用例辞典には一まず含めないことにします。

さて、右に述べたような時期の資料文献には、印刷公開されたものとして次のようなものがあります。

教科書
法令・公用文書
新聞
雑誌
単行本全集本の書籍（文芸を除く）
文芸作品
国会速記録
辞典その他語学資料
広告その他

右のほかに手書きのままの原稿や日記・通信文等がありますが、これらは差当り直接の資料とはしないでしょう。右にあげた各種の文献はそれぞれ独自の形態をもつと考えられますが、その性質についてはさきに飛田良文君が「文学語学」六十六号「近代語研究の資料」で、信頼性、文章の機能、内容、文体等の観点から分類しています。辞典編集準備室では、これらの資料の目録作業を進めています。

主として小説作品については、十五種の文学全集で三種以上に採録された作品の年代別、作品別総目録を作成しました。また十人の評論家、作家、研究家の方々にお願いして、その千五百余編の中か

ら、およそ百編を目安に、用語採集の基礎的作品を選定していただいています。雑誌記事については、国会図書館の目録によって、約二万八千点の雑誌の中から、二十年以上継続出版されたものを選び出して、「用例採集のための主要雑誌目録」を作成しました。単行の書籍については、各種の資料から、かつてベストセラー、ロングセラーと認められたもののリストを目下作成中です。

この期のこれらの資料全体に含まれる語の数は、恐らく限定することがむだなほどでしょうが、仮に日本国語大辞典を手がかりにして、登録されるべき語の数を異なり三十万とし、一語について平均百個の実例が必要であるとすれば、約三千万例を採集することになります。三千万というのは、作業上なかなか大きな数ですが、これをフランスのTLF（十九二十世紀フランス語宝典）のために集められた用例が、一億を超えていると言われるのには、はるかに及びません。

いずれにせよこれらの大量の採集をどのような方法で行うか、それには、できるだけ多くの文章に目をさらして、適切な用例を摘み拾うこととともに、ある基準的な文献群について用語総索引を作ることが考えられます。目下のところわれわれは、教科書の国定読本と、専門家によって選ばれた百編の小説作品とについて総索引を作りたいと考えています。その言語量は五百万文節程度とざっと見積もっています。そのほかの多種多様な資料文献については、もとより通巻通読によることもあり、またある場合にはページ等を標本抽出して採集することもありましょう。その用例の摘み拾いにも、密度の濃い場合、薄い場合があるべく、それらは今後、一々の資料の性質の具体的な検討によって定められることになりましょう。またこれには、採集者の目の偏りが問題になることですが、実際の作業にかかる前に、採集の原則を確立しなければならないのは言うまでもありません。

採集の技術としては、電算機を利用する方法と、手作業による方法とがあります。電算機は、総索引作成に最も適しています。原文を打ち込み、これに単位切り等の操作を加えてプログラムを実行すれば、前後指定する長さの文脈を伴い、出所を示した、所要の排列の総索引が、作品ごとに、作品群ごとに、また全作品についてまとめられます。電算機から打ち出されたその結果は、そのまま写真印刷の原稿になるでしょう。

手作業ではカードを用います。一定の大きさのカードに、原文の必要箇所を手書きで転写し、見出しや出所その他の注記を記入するもの、これは広く粗く採集するための方法です。一方、原本をそのままカードに複写し、又は複写してカードに裁ち、そのカードに所要の見出し及び語指定のマークの記入をする方法は、総索引又は密度の濃い摘み取りに応用されます。かつてわれわれは語彙調査の際、原文をタイプ孔版で翻印したカードを作りましたが、複写技術が進歩した今日ではそれは考えられなくなりました。これらの手作業については、原本における採集指定作業とカード化の手工的作業とが分けられます。前者を担当するのが採集者で、それには採集方針が確定する必要があるとともに、ある水準の国語学的知識が要請されましょう。NED（オクスフォード新英語辞典）の編集のためには、多くの人が用例の提供に協力したということです。そのような全く無償の奉仕をわれわれが期待することは無理だと思いますが、この大きな事業には何といっても少なからぬ努力を借りなけれ

ばなりませんので、まず学会員の方々の理解を得ておきたいと願っている次第です。

採集上の一定の方針というのには、第一に、目あてとする語の単位（語の長さ、大きさ）が問題になります。研究所では、語彙調査のたびごとにいろいろな単位の取り方を工夫してきました。それにはまだ議論があります。私個人の意見を述べることが許されるなら、私としては、総索引の場合には、短かく切った単位の方が、目あての用例を取り出すために便利であろう。摘み取り採集の場合には、計量が主目的でないとすればあまり厳密に単位を統一する必要はなかろうと思っているのですが、これも目下検討中の大きな項目です。

電算機が結果として打ち出した総索引がすぐ印刷に移して広い利用に供し得ることは前に触れました（五百万の用例は、A4判で十万ページをはるかに超えるものになりましょうが）。また必要な部分をカード型に印字して、詳しい用法分析に使用することもできるはずです。一方、手作業のカードは、これを公開の資料とするためには、改めて編集し活字に組んで印刷物にする必要があります。その場合にはやはりある程度の抽出によって、用例の数を適当な大きさに限定することになるでしょうが、せっかく集められたカードは、すべてを一定の方針で排列保管して、検出閲覧ができるようにしなければなりますまい。辞書記述のための一種のデータバンクで、その容量が物理的に問題になります。なお、多量のカードは、一定の大きさに統一されてあることが必要で、見坊豪紀氏は、カード記載内容の大きさ（特に原本複写の場合）やカード取扱いの上から、A5判たて半裁を提案しておられます。

さて最も肝腎なのは、この事業を実行するための組織と費用の問題です。目下のところ研究所では、辞典編集調査会（所内外の委員二十名）、また辞典編集準備室（主幹副主幹に研究員併任のほか非常勤職員数名）を設けて、右に述べてきたような大綱の立案審議や、各種資料の作成、作業の実験を進めています。第一次作業の大きさは、少なくとも十五年間と見込んでいるのですが、実際に作業に取りかかるには、そのための予算や定員を確保することに努力しなければなりません。これは、国の財政のはなはだきびしい引きしめの状況にあっては、餅を絵に描いているような感じもしないではありません。しかし、部分的にも逐次実現して、出来ただけは早く大方の利用に供するようにしたいと期している次第です。

いつか学会の折にでも口頭でお聞き願おうと思っていましたが、幸いにここに紙面を許されましたので、右のようなあらましを書きつけました。

なお付け加えますが、国立国語研究所としては、別に日本語教育センターに委員会を設けて、外国人の日本語学習者のために母語別学習辞典を編集する仕事を進めています。これは約一万二千語について学習者の母語で解説する日本語―外国語辞典で、在来の和英辞典等とはちがった、外国人用の中級学習辞典としての特色をもつことになりましょう。外国語はインドネシア語を始め各国語に及ぶ予定ですが、目下はその項目の選定と、基になる日本文原稿の作成が大部分用意されつつある段階です。（昭和五十五年十二月）

――国立国語研究所長――